

勘ちがい

菊池 佐紀

Saki Kikuchi

きくち・さき 文芸誌『アミーゴ』編集発行人・県生涯学習推進講師。12月、松山一週会にて「遠藤周作のイエス観」を講話。愛媛文芸協会主催「文章実戦講座」の講師を6ヶ月間つとめる。北条市在住。

市内電車を廃止した都市が全国的に増える中で、松山市内を昔ながらの路面電車がゆっくり走る光景はいかにもやさしい城下町らしく、心のほぐれるのを覚える。しかし、道後温泉行きと市駅行きの二本立てが時として観光客を面喰らわせ、あわてさせているようだ。

二年ほど前のある朝、大手町あたりを歩いていて、見知らぬ旅行者に声をかけられた。ご夫婦らしい中年のそのカップルは、「道後温泉に行きたいのですが……」と言う。はいはいと、私は愛想よく応じた。いつか東京のど真ん中で、学生風の若者に道を尋ねたところ、彼は私を無視してサッサと行ってしまった。その時の心細い体験があるので、道を訊かれた場合は丁寧に教えることにしている。

「そら、向こうに電車の停留所がありますね。あそこから『道後温泉行き』の電車に乗って下さい。終点が道後です」

いんぎんに札を述べた二人は大手町停留所へ道路を渡って行き、松山駅方面からタイミングよくやって来

た電車に乗り込んだ。

が、私はアツと声をあげた。それはなんと「市駅行き」の電車だったのである。

あいにく青信号が赤に変わって、停まっていた路上の車が動き出し、まちがいを知らずに道路を走って渡ることができなかった。

「ちがう、ちがう、それはダメ」と喚びながら懸命に合図したものの通じない。窓際に立ってこちらを見ていた上品なご夫婦は、私が別れを惜しんで手を振っていると勘ちがいのしたのか、自分たちも盛んに手を振って応じてくれる。

次第に遠ざかって行く電車を見送りながら私はいつまでも突っ立っていた。終点で降りたあの人たちはどうなる……やっぱり、漱石が松山人をキラッたはずだ、信用できないね。あのご主人はそう言ったかもしれない。大手町周辺を歩く度に、今でもほろ苦い思いがこみ上げてくる。